

俺もう、闘いたくない  
です

Plusdriver

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初代を3日でクリアしたので書いてみた。

# 目次

- (闘いたく) ないです | 1
- (潜りたく) ないです | 9
- (最後の戦いでは) ないです | 15
- (思うようにはいか) ないです | 23
- (逃走に終わりは) ないです | 29
- (これ以上逃げられ) ないです | 35
- (エラーは出まくって) ないです | 42
- (ここに居たく) ないです | 48
- (裏切つては) ないです | 59
- (アルテミスに出るしか) ないです | 59
- (人質に取られてなんて) ないです | 77
- (スレイブプレイヤーになつては) ないです | 77
- です | 82
- (戦いに決着が付か) ないです | 88
- (ストーカーが進化して) ないです | 94
- (もう理解したく) ないです | 100
- (友情ごっこじゃ) ないです | 111

151	(やはり俺もう、闘いたく) ないです	
144	(迎えに来たわけじゃ) ないです	
	(壊れて) ないです	137
	(一人じゃ) ないです	131
	(聞落ちじゃ) ないです	126
	(主人公して) ないです	118

(闘いたく) ないです

四角い戦場で戦う小さな戦士達、人は彼らをダンボール戦機と呼んだ

「(呼んで) ないです」

誰もが一度思った事だろう。何度も何度も聞かされた言葉のはずなのに、結局本編で呼ばれた事ってあったのかという事だ。某5ドラゴンsだって、最終的に6体が増えるし。

『行け、アキレス!』

「あ、出番ですか」

フィールドに降り立てば、目の前には少し不気味な奴が。

「エジプト、か」

もしかしたらコントロール出来るようになるんじゃないかね?と疑問を持ちながらも身体は勝手に槍を構える。

「待って、そう言えば今後片腕もがれたり、壊されたりするくね」

今すぐにも逃げ出したいが、少年にその力はない。あるのは…唯一つ。

『必殺ファンクション!』

「ハイハイライトニングランスっ!!!!!!」  
手首が、手首がああああああ!!!!と喚くことだけである。

悲報、目が覚めたらロボットになってました。

「なんでさあああああ!!!」

身体は自分の意志で動かないし、真つ暗闇から出られたと思えばすぐさま戦わされるし、後何あの单眼たちは!?

『アキレスを返せ!』

過去の事は思い出せないし、相棒とも言えそうな少年は結構無茶な事させるし。アーマーがしっかりしていないせいか、滅茶苦茶痛かったんですけど。

『我王砲』

爆散!

「え、アイツと戦い続けるの?」

『いつけえ!』

あの、ハカイオーさん? 私闘いたくないんですけど…

ひつ、た、盾が無ければ即死だった…

『必殺ファンクション!』

え、ちよつと待って。手首が、手首がアアアアアアア

!!!!!!!

ぎやああアアアアアアア

!!!!!!!

腕もげたああああ!!!

え、ハカイオーさん。腕貸してくれるんですか? 嬉しいなあ

ちよ、力強すぎイ!

め、目が回るううううううううううう

!!!!

え、分身とかアリですかあああああああああああああああああ!?

あ、アレ、身体が上手く動かせる？

『Vモード… あの時と同じか!』

え、Vモード? あ、ジョーカーさんが特攻して… ええい、ままよ!!!

あ、動けるうううううううううう!!!

ドローモ、ジョーカーさん。アキレスです。

『デスサイズハリケーン』

あ、めっちゃ回ってる!

あ、ちよ、風!!!、吹き飛ばされて、たまるかああああああ

ふう…

!!!!!!

『コントロール、出来ない!』

だろうな、仕方が無い。このまま闘い続けても、ここから逃げ出せないしな。

「よう、マスター!」

『な、何だ!? メッセージが!』

お、上手く言った!

「説明は後だ。今からコントロールを移す! このままジョーカーさんに勝て!」

『え、あ、うん!』

これで良しつと。また身体が動かせなくなるけど、次の機会を狙いますかね。



「お帰り、私の腕!!!!!!」

本当にありがとう!!ハカイオーさんのマスター!これで思いつ切り逃げ出せる!!!

流れ込んでくりゆうううううううううううう  
「な、何だ!?!、オーティーン?え、まだ闘うの!?!」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

『山野バン!』

「エンペラーさんつ!」

あ、マスカレードさんまでつ!

『あははははは!!!!!!』

え、ビビンバ!バードさん!?!や、辞めろジャッジ!!首が、

ジャツジのマスター、私が、俺が止めてやる…

『アドバンスド V モード』

どうやらマスターの考えもそれみたいだ。

「マスター！少しコントロールを奪うぞ!!」

『分かった!』

!!!  
一時的だけどコントロール？奪成功！エンペラーさんこのままアイツを破壊する

「ふう、エンペラーさんともこれで決着か…」

長いようで短い… そう言えば、何でこうなることを知ってたんだろう…

「あんまり、こういうのは好きじゃないんだがな…」

マスターにもヒントぐらい残しておこうか？いや、きつと次の機体が彼を支えてくれるはずだ。

「じゃあな、マスター。闘うのは好きじゃないが、あんたのことは気に入ってたぜ！」

そして、こうなるんだ

---

「え、また戦うの!？」

どうやら今度は、変形できるらしい!？」

---

(潜りたく) ないです

え、あ、まだ闘うの？

『リニアが、暴走してます！』

『なんだって!?!』

折角戦いが終わったと思っていたのに… 仕方がない。

「マスター、聞こえるか？」

『!?!、メッセージ?… オーデインから!?!』

『何!?!』

あ、やべ、マスター話してなかったのかよ。よつと。

『勝手に変形した!?!』

『何がどうなってるんだ!?!』

本当にソウデスネ。当事者である私もそれがわからないよ…

「マスター、リニアを止めたいんだろ？」

『っ、ああ!』

「以前話したよな。私は、闘うのが好きではないと」

『…』

「だが、沢山の人の為ならば、私も力を貸そう」

『… ありがとう、オーディーン』

ふむ、そろそろ名前を付けた方がいいかもしれないな。それよりもつと

「その宇崎社長に、コントロールポッドを借りろ！私は先に行く！」

『ああ、頼んだぞ！』

さうて、一仕事と行きますか！

あ、二丁拳銃したいから、これ貰ってくね。

『お待ちせ！』

「今、内部に侵入したところだ！」



マスターにコントロールを移してっと。って、マスター、この身体を上手く操れてないのか？

仕方がないか、アキレスとスペックが違うすぎるからな。

『必殺フアंकション！』

おう、もう手首があなんてしなくていいからな！

って、全身が、いたたたたたたた

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

『グングニル』

LP減らないけど、これ結構痛いかな。

『そんな、止まらないなんて！』

制御システムをぶっ壊したけど、どうにも止まりそうにないな。このままだとマスター達にも被害が及びかねない。

「マスター、少し無茶をする」





『と、止まった』

っと、マスターそっちのけだったな。

「これで問題解決だマスター。プロトゼノンさんのマスターにもよろしくな」  
『ま、待ってくれオーティーン！』

ちよっと、無茶し過ぎたな。ロボットのはずなのに、意識が…

(最後の戦いでは) ないです

「マスター、行けるか？」

『ごめん、心配かけて。必ず、イノベーターを倒す！』

どうやらマスターは吹っ切れたようだ。まあ、目の前で人が引かれ亡くなれば、誰だって引きこもりたくなる。

『俺は、オーデイーンの隣に、居続けたいんだ。その為の、力が』

何だか最近、マスターの様子がおかしい。正確には分からないが、よくパソコンに向かう様になった。

『ここをこうして、これを』

画面に映し出されたのは、本来ならば存在しないアーマーフレーム。

そのアーマーは後に、世界を破壊し兼ねないだろう。

アーマーフレーム『オーレギオン』。原作とは異なり、最新し続けられ、様々なLBXの特徴を持つようになる。それを作り出したのは山野博士だが、この世界ではバンが創

り上げることとなるのだが、LBXである彼が気が付くこともない。

「楽しそうだな、マスター」

『うん、今俺、滅茶苦茶楽しいんだ!!!』

うんうん、マスターはいい子だなあ。人の死を乗り越えて、闘えるなんて。

でも、これ以上彼らを戦いに巻き込み続けるわけにもいかない。

「…必ず、この戦いを終わらせよう」

『勿論』

もう一度、私が壊れようとも。

ゼノンさんのマスター…必ず、本当の首謀者を倒してみせる。

『バン君、行くう』

『ああ』

こんな悲しい事が連鎖しない様に。

妖精と名のついた彼らは、私の様に自我を持っていた。

「排除、排除、排除」

「……」

それを、認めることはできないが。だからこそ、言わせてもらおう。

「安らかに眠れ…… 我が同胞たちよ」

『オーディーン……』

「良いんだマスター。私達は使い手によって、善にも悪にもなる。だからこそ、その道を間違えないでほしい」

これで決まりだ。レックス、その先にいるイフリート。必ず、倒してみせる……

そうおもっていたんだけどなあ……

「もっと、もっと、貴方を壊させて」

「ぐ、があ……があああっ」  
!!!!!!」

『っ、オーデイン!!!』

イフリートが、こんなにも強いなんて、な……

『そんなものか?』

「黙って欲しいな、イフリートのマスター。こんな所で追われる私達ではない!!!!!!」

畜生、全身が痛い。あのイフリート… 何故か知らないが、とても嫌な予感がする…  
『まだいけるな?』

「ああ、まだいけるとも!!!」

『インフェルノモーター…ドオ』  
『壊して、壊して壊しまくる!!!世界も、貴方も、何もかも!!!』  
!!!!!!  
!!!!!!

あれが、イフリートのマスターの本性。本当に上手く隠していたものだな。

「マスター、アレを使うぞ」

『…分かった』

私達がイフリートに勝つ方法は一様の為に残しておいたあれしかない。

『クロスオーバー!!!』

『うおおおおお!!!』

マスターと私が考えていた最初で最後の奥の掟、それがクロスオーバーモード。マスターにも負荷がかかるこのモードだけは使いたくなかったが、な。







あ、ま、まさか……！

マスターにこれからの未来への希望を見出して、成長させるための、今までの戦いが、  
全て歪んで伝わったのか!?

「先ずは、お前だ」

そしてイフリートは、自身のマスターにまで攻撃を開始した。

(思うようにはいか) ないです

やるしかない!!

「貴方に用はない。だが、邪魔をするなら話は別だ!!!」

「ぐっ!?!」

マスターに、全てを託すしかない!!!!!!

『オーディーンのコントロールを取得しました』

『… わかったよ、オーディーン!』

「後は、頼んだぞ」

今まで身体のコントロールを完全には譲らなかつた私だが、ここでマスターに譲つたのは間違いではないと思っている。

『止めるんだ… オーディーン!!!!!!』

ああ、またかマスター。君はいっ!つだつてそうだ。コントロールを譲つても、私を呼び覚ます。

「おう!!!!!!」

だから、精一杯返してやらないとな  
!!!!!!

『必殺ファンクション!!!!!!』

『ライトニングランス』

手首の痛みがなんぼのもんじやい!!!!!!  
!!!!!!ここでイフリートを止める  
!!!!!!

何度止められようとも、私達は止まらない!!!!

『超プラズマバースト!!!!!!』

そして、私は貫通したのだ。

「……イフリートを倒したぞ、マスター」

『ああ。レックス。超プラズマバースト、レックスに教えてもらった技だよ』



『待つてくれ！オーディーン！！！！』

自ら、防災用のシヤッターを下ろし、マスター達とイフリートを突き放した。

「さて、これでは私とお前だけだ」

「……壊す、壊す、壊すうううううううううううううううううううう！！！！」

やつべ、盾は壊れてるし、鎗も使い物にならねえ……！！！！

あ

「……マスターに感謝だな。これで何とか闘える」

装備品の中に、見覚えのあるモノが残っていた。！！！！！！！！

「さて、始めようか！！！！イフリートオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

！！！！！！！！

二丁の拳銃を構え、私はイフリートへと

『……お前は、この世界をどう思う？』

「私は、この世界を知らなすぎる。だから、一旦マスターから離れることにする。レック

ス、貴方に感謝を」

『……ふつ、お前たちによって俺は新しい希望を見つけられた。だから、これは褒美だ』

「メタナスGXと鍵か：し  
かと受け取った」  
『この世界を、頼んだぞ』

「さて、何処へ行こうか？」

先ずは、身体を直さなきやな。TOにでも行こうか。



(逃走に終わりは) ないです

どうも、T O社の皆さん。オーディーンです。

『ゆ、行方不明のオーディーン!?』

これからのことにマスターを巻き込みたくないんだよなあ… そうだ!

「すまないが、私のメンテナンスを頼めないか。出来れば、山野バンには内緒で」  
これで…

『… 本当にオーディーンからメッセージが着てる…』

お、上手くいつて

『凄い!凄いですよ!オーディーン!!!!』

あ、ちよ、やめ、やめろお!!!!

「結城さん!」

「やあ、遅かったね」

「そんな… それじゃあオーディーンはもう…」

「彼は君に渡してほしいものがあると頼んできたんだ。これを受け取ってほしい」

「メタナスGXとブルーキャッツの鍵… レックスからの、贈り物…」

「バン…」

「俺は待つよ。イプシロンにメタナスGXを搭載して、オーディーンの帰りを」

「あ、オーディーンの時メッセージのデータを全て下さい」

いやあ、飛行形態って不思議な体型だけど、これはこれでアリだね。簡単に目的地まで行けるし。

『やあ、待っていたよ。オーデイン』

どうやらマスターはTOへと向かったようだ。これは好都合。

「山野博士。いや、我が父と呼ぶべきなのだろうか」

『…私も、君が自我を持つなんて、予想は出来なかったがね』

そのおかげで助かった場面も多い。だからこそ、今回は博士を頼りにきたのだ。

「頼みが有ります。エターナルサイクラーの技術を使用したバッテリーを作って頂きた  
す」

『それは、何の為に』

理由は二つあるが、重要なのは後者だろう。

「生き延びた、イフリートを倒すために」

『?!?…イフリートが、まだ動いているというのか』

あ、序に音声ユニットとか貰えますか？いい加減、一々メッセージでの意思疎通は面倒

なので。

『感謝する。山野博士、この事はマスターには黙っていてくれないか?』

「…分かった。良き旅を」

『では、行ってくる』

「不思議なものだな。私が作った彼に、自我が宿るなんてな」

「あら? 不思議ではないでしょう? 貴方と私の間にも、バンがいるんだから」

「それもそうか…。しばらくは、仕事を休む事にするよ」

「改めて、お帰りなさい。アナタ」

「ああ、ただいま」

「父さん？今日ここにオーディーンが来てなかった？」

「っ、何のことだ？」

「おかしいな… オーディーンの気配が残っているのに…」

「… 強く、生きてくれ、オーディーン」

フへへへ自由だ

「見つけた…」

げ、パンドラさん!?!なぜここに!?!まさか自力で脱出を!?!

『見つけたわよオーティーン、必ずバンに会わせるんだから!』

イフリートなみに、逃げずらい!!!

(これ以上逃げられ) ないです

「久しぶりだな、我が王よ」

「ああ、半年ぶりだろうか」

パンドラさんに追われてからもう半年が過ぎた。既にイフリートとの因縁に決着を果たした私は、久々に仲間友の元を訪れていた。

「最近、マスターとカズヤは仲良くやっているか？」

「無論、我が主と我が王の主の仲はより一層深まりつつある。因縁にも決着がついたのだから、そろそろ戻ってみてはいかがだろうか？」

「そうしたいのは山々なのだが、問題があつてな」

仕方がないのだ。だって私が帰ればそれだけで何をされるかわからないんだもの。

「君はもうここに来てはならない」

『私が頼れる数少ない人が集まるここに来てはならないと？』

「そうだ。君がここに来るようになってから、バンの様子がおかしくなっていていつてな。

もし君に会ってしまえば、どうなってしまうのか、予想が出来ないんだ」

『：：分かった。暫く様子を見てみることにする。夜遅くに済まない、山野博士』  
「構わない。：：必ず、逃げ切ってくれ」

——なんてことを山野博士に言われてしまえば、恐怖を覚えてしまうもの。マスタ―に会ってはみたいものの、イフリートみたいに捕まえようとするのだけはやめて欲しい。

「ふむ、そろそろ我が目が覚ます頃合いだ」

「分かった。またいつか、再び会える日を楽しみにしているぞ。フェンリル」

「ご武運を、我が王よ」



「なあフェンリル。もしかしてお前、オーディーンに会っていないか？バンがフェンリルからオーディーンの気配がするって言って聞かなくてよ」

…  
我が王よ、強く生きてくれ

「いい加減に、捕まって…」

「断る。まだ私の旅は続いている！」

もう何度目だろうか。パンドラとそのマスターに見つかり、逃げ回っているのは。

『もうそろそろ一年経つのだよ！そろそろ帰って来たらどうなの？』

パンドラのマスターって、本当にバンの事が好きだよなあ…恋する乙女は最強なの

か

「もう、辞めたいのに…」

「…君も苦労しているようだな、パンドラ」

余り口数も多くないパンドラ。無口なミスティアスレディ。その名がふさわしいだろう。

「さて、このくらいで失礼する！」

飛行形態に変形して、音速でに逃げる！流石にパンドラのマスターは居ってはこれマ  
イ!!!

『っ！待ちなさい！』

「今回は、秘密兵器もあるんだよ…」

げえ!?! ネットを発射できるランチャーだど!?! そんなもの一体どこから…

「乙女の秘密…」

『ネット発射!』

「このまま、逃げ切る!!!」  
『JETストライカー』

「あくあ、また逃げられた。パンドラ、今度こそ捕まえようね！」

…  
そろそろ、終わってほしい。このランチャーとか、ホントに、重い…

世界中で、LBXが暴れているのか……どうやら世界は私に平穏を与えるつもりはな  
いらしい。

「待っている、マスター!!!」

目指すはトキオシアデパート  
!!!!

(エラーは出まくって) ないです

これは… ひどい…

何でこんなことになってしまったんだ？

あ、あれは!?

ふえ、フエンリル!?

「我が、王よ…」

「もういい、しゃべるな」

フエンリルを破壊した者はどこにいる… 必ず、壊してやる…

「!?、パンドラ!!!」

パンドラまで… こいつらは、一体何を考えてやがる…

「誰か、私の質問に答えてくれないか?」

誰も返事をしない。それどころか、意識自体が表に出てきていない?

『つ!?、イプシロン!!!』

この声は、マスターか!?

あの黒いの……アキレス私か?

「その通りだ、我が王よ」

「……アイツが暴れたら、皆暴れ出した……」  
「成程。つまり……」

アイツが元凶!!!!

『JETストライカー  
!!!!!!!』

ちい、交わすんじゃない!?

『オーティーン!?!』

このままこいつと闘い続けても良いが、マスター達も巻き込まれる。  
一旦引かせるか…

「貴様、行け」

「…?」

…こいつも、自我がないのか…

全く、結局何か新しい面々と共に戦ったけど逃げられたし…

「…あの子、中国にいるみたい…」

え、パンドラさん。自分のマスターの居場所がわかるの？

「…ぶこ」

絆の深さといいますが、CPUが操縦者よりに進化したといえますか

「…私のマスターは、今も昔も二人だけ…彼女だけでも守ってみせる…」

「君は本当に…マスターの事が好きなのだな」

「…あの子のメンテナンス、気持ちいいんだもの…」



： あれれ〜？おつかしいぞ〜？

取り敢えず、目指すは中国ってことだね！

「オーデイーン：：」

「バンさん、今のは：：」

「ああ、あいつはオーデイーン。俺の、大切な、仲間なんだ」

「：： また会えますよ、きつと」

「勿論：：： 今度こそ、ニガサナイ：：：」

「ペルセウス、これから僕たちは、世界を救いに行くんですよ!!!」

正義のミカタ、それはとても心に響く言葉だ！必ず、僕たちのモノにしよう！

「エルシオン、必ずこの戦いを終わらせて、オーティーンの隣にいらおう」  
ええ必ず、兄様の隣を我が物に。

「ミネルバ、これからよろしくね！」

お兄ちゃん隣の隣は私のもの！これだけは譲らないよ！

もちろん、あのニセモノもぶっ壊す!!!

「我が王よ、いい加減認めたらどうだろうか」

：： フェンリル、それは言わないでくれ

「：：： 迷ったんだね：：：」

ああああああ、パンドラさん!!!それは言っちゃいけないよ!!!

「：：： きつと、多分、ここのはずだ」

「：：： 曖昧」

うるさい、うるさい、うるさい!!!

（ここに居たく）ないです

や、やっと着いた…

「時間、かかり過ぎ…」

パンドラさん！もうそれはいいでしょ！

「…アミ様の、身に何かあれば、その原因を排除する…」

物騒だな…でも、それだけ大切な人なんだな

「…うん…」

「我が王よ、上から何か落ちてくるぞ」

「何!?!」

げ、本当に落ちてきてるし!?!しかも、ミネルバか？

「あ、お兄ちゃんだ〜!」

「そんなことを言っている場合か!」

仕方がない！空中で無理やり変形して、ミネルバを抱えて上まで行くしかない！

「んん〜、久々のお兄ちゃん〜」

「…この子、危険…」

「我が王よ、早く離れることを薦める」

…  
やっぱり、みんなそう思う？

「バン、ライディングソーサを使うでよ！」

「わかつ!？」

『久しぶりだな、マスター』

「オーデーイン!!!」

「嘘、LBXが喋ってる…」

『君がミネルバのマスターか。彼女を頼む』

「あ、はい」

『マスター！私がその戦いを引き継ぐ！すぐさまコンピュータを止めろ!!!』  
「分かった!!!」

「パーフェクトZX―3か… 久しいな」

「…」

彼らは無口だがとても愛を込めて作られているのか、何となくだが意識が読み取れる。

「聞こえているな、オタクロス！」

『久しぶりじゃの、オーディーン。アミたんを助け出すでよ！』

「ああ!!」

「ダークパンドラさんが、強い。と、言うより危険だ。意識はない上に、ただの兵器として設計されている…」

「：： アミ様が、闇アミ様に：： これはこれで：：」

「パンドラさん、ここに置いていきますよ？」

「：： それは困る。自重する」

「よし、これで戦いに集中出来る。」



『メガサンダークロス』

『グングニル』

何とか、倒せてよかつた「アミ様！」

あ、ちよ、パンドラさん!? 身体を乗っ取った上にこのままだと、パンドラのマスターの下敷きに…

「…大丈夫、頭を守るだけだから…」

そうは言っても、なっ?!いい、LBXが人間の身体を支えるのは、流石に無理…!  
『アミたん!』

どうやら無事に、洗脳を解除されたようだ。

「…そろそろ、お別れ…」

…彼女についていくんだな。わかった。

「マスター、これを」

『これは…パンドラのCPU?』

「そこには、彼女と共に戦ってきたパンドラの意志が宿っている。彼女の為に、身体を作ってほしい」

『…わかったよ、オーデイン。頼んでみる』

「…また、今度…」

「元気でな、我が戦友よ」

パンドラさん、必ず、合流しましょうね

「…うん…」

「オーデイーン、君は、いつだってバン君を支えているんだね」

ズルいなあ：：僕だって、彼のお陰で変わったのに：：

「君が望むのなら、必ず彼を捕まえよう。その為の僕だ」

A国に留学して、脳について研究しているのも、君について調べるためなんだから

「で、オーディエーン？何でこの国に居るの？」

『そ、それには理由があつてだな…』

「理由、ね？」

待つてくれマスター！ハイライトが消滅した目でこつちを見ないでくれ！

「我が王よ、ここは一旦引くべきだ」

そうだね、逃げるが勝ち！

『い、今は話せない…だから、少し待つてくれないか？私が話せるその時まで』

「… わかった。でも、その代わりに…」

「よろしくお願いします！」

「やったー！お兄ちゃんと戦えるー!!!」

「兄様、お手合わせをお願いします」

「トリトーンと言う、よろしく頼む」

「…… リユウジ、 出撃」

「ジャンヌDよ、よろしくね」

∴ なんだこれ？

「我が王よ、諦めろ」

フェンリルう∴∴

「そんな声を出さないで頂きたい」

∴∴ ああん、もう!!! やってやる、やってやるさ!!!

「さあ来い、若者達よ。私は決して手は抜かないぞ？」

(アルテミスに出るしか) ないです

…  
疲れたあ

「我が王よ、熱いのだが…」

あ、モーターが逝かれてる…新品の予備があったつけ？

あ…しまった。イフリートとの戦いで、交換しちまったんだった。

「肝心のイフリートだが、未だ動いているのだろうか？」

「ああ。コアボックスを空にしたのに、動き続けている」

ホントにもう、私を追いかけ続けるのをやめて欲しい。にしても、モーター二つだと、少し動きづらいな…

『アルテミス！』

ん、アルテミス？あの大会の景品といえば、高性能なものばかり…オタククロスにでも調べてもらおうかな。

『オタクロス、調べて欲しい事がある』

「なんでよ？ オーディーンが調べ物など珍しいでよね」

『気になるものがあっただな。今年のアルテミスの景品を教えてください』

「ふむ… 『モーター』 のようによ。これが気になるのかですよ？」

『ああ。序にだが』

ふっふっふっふっ… これで新しいモーターが手に入る!!!



五条さん…… 貴方に会いたかった。でも仕方がないじゃない。本部でこの身体のコントロールを練習しなければならなかったんだもの。

『レックス、メタナスGXを使わせて貰う』

いやはや、身体を作ろうと思えばやっぱりこれだよ。でもさ、オタクロス……

『何故、女体なの？』

「…… 似合っているぞ、我が王女よ」

やめてフェンリル！そんなこと言われると面倒な事になるう！

「……お前は誰だ？」  
「ジャツカルさん、チームを組んでくれませんか？」

「何者でもありませんよ。私の目的は唯一つ。あのモーターを手に入れることだけです。さあ、私を利用してみませんか？」

「…… 良いだろう。但し、邪魔だけはするなよ」

「ええ、勿論です。全ては、貴方の目的のために」

ジャツカルさんと同じチームになって無理矢理参加とか、面白そうじゃない？

「そういうものなのか、我が王よ」

ああ、うん。何も、言わないでね？ あ、序につと。

「あの、エントリーをお願いできますか？」

「出場資格をお持ちですか？」

「はい。アングラビシタスの主催者です」

「さあ、必ず優勝するぞ!!」

「これで受付完了ですね！」

「そうだな。にしても何だか、オーデイーンの気配がすつごくするんだよな……」

「バン君も、か」

「ええ!? オーデイーンがここに來てるの?」

「まあ最近、よく行方をくらませていたからねえ」

「……危なかった。もしばれたら、この身体ごと捕獲され兼ねない……」

「……ミツケタ」

「つつつ?」

「我が輩よ、大丈夫か?」

「アイツが、ここに向かってる…」

もう、会いたくもないんだけどな… 残っちゃまった亡霊には…

「…  
イフリート」

(裏切っては) ないです

順調、順調

「久々のハンターだが、やはり良いものだな」

あ、そう思う？この為に残っていたハンターのアーマーフレームを改良しておいたんだよね

「我が王よ、暫しハンターと呼んでくれないか？」

ん、了解！

「あの子から、オーデインの気配がする…」

「何故だ…」

「何か2人が怖いよ…」

「そうですね…」

「オーティーンが関わると何時もこうなるのかしら？」

「ジン君…」

『初参加にして決勝進出を果たした謎のメイド、ミカド選手  
「フフフ、ちよろいものですわ」  
!!!!!!』

「狙い撃つ」

『ステインガーマイスイル』

「近づいたなら、切りつける」

あああああ、SO☆GE☆KI!と二刀流楽しいiiiiiiii  
「悪くない。いい経験になった」  
!!!!!!!  
でしょ!でしょ!さあ、後少しで…

「おい」



あ、すっかり忘れてた。

「お待たせしました。手伝いましょうか？」

「…フン」

あらら。まあいいでしょう。任された仕事はするだけです。ええ、するだけです。

『な、なんだこれは!?!』

上手くいきましたね。

「…… 我が王よ」

何、ハンター?

「…… いや、何でもない」

我が王よ、疲れていたのだな…… ストレスとやらがこれで発散されたのならいいのだが……

「さて決勝ですが、ハンター。私の身体に入って貰います」

「了解した」

「さてさて、皆さんはどのような反応をしますかね?」

『Bブロック代表、天野ミカド選手!!!』

ああ、一番短くなっちゃった…

『それでは栄光のアルテミス、ファイナルステージ… READY?』

ああ、みんながLBXを出撃させてる… 私達も行かなきゃ

「頼んだよ、オーティーン!!!」

「オーディーン!?!」

何でオーディーンがあの子の元に… ナンデ… ドウシテ…

兄様… じゃない… 中身はフェンリルだな

思いつ切り戦い抜く!

… フン、オーディーンか… 久しぶりに、手合わせ願おうか  
!!!!

「我が王よ…」

な、何？今攻撃をかわし続けるのに苦勞しているんだけど…

「この戦いの後、直ぐにこの場を離れる事を推奨する」

…  
正体、ばれちゃった？

「お疲れ様でした、ビビンバードゴールドさん」

残っているのはマスターとペルセウスのマスター、あと吸血猫のマスターだけ

「ここで決めさせて貰います、必殺ファンクション  
!!!!!!」

『JETストライカー  
!!!!!!』

『今年の優勝は初出場、天野ミカドとなりました』

これでスパーク30000ゲットだぜ!!!

!!!!!!!

「…ピっピカ、チュウ」

「この場をお借りして、謝罪をさせて下さい。大統領暗殺を企てていた犯人のCCM映像を流したのは私です。どうしても、あの形でしか止めることが出来ませんでした。…」

世界中のLBXが大好きな皆さん、どうか、私を許してほしい」

他に方法があつたかもしれないが、私にできたのはそれだけ…。ていうか、暗殺よりも危険な人たちがずっとこつちを見てるんだけど…。

「待っていたよ、天野ミカド」

と、トリトーンのマスター…

「何の御用でしょうか、海道さん」

「ジンで構わない…何故君がオーディーンを使っている」

ですよねー、それが一番聞きたいことでしょうし!!!

「…言わなくてもいい。既に僕は気づいている。君が、君自身がオーディーンなのだろう」

…あれ、積んでね？



(人質に取られてなんて) ないです

「……」

「無言は肯定とさせて貰おう」

トリトーンのマスター……

「……何が目的ですか?」

「僕たちの仲間になって欲しい————と云うべきなのだろう。だが、今回は元の姿になってバン君の元へ戻ってほしい」

え、そんなことでもいいの?

「わかりました」

彼女がオーディーンである確信はついた。そしてあの体の発明者もわかった。

「今はまだ君を連れて帰れないんだ。必ず……」

彼女を連れて、バン君の元へ行くんだ。彼が望むなら、海外でも、日本でも、何処で

も移住してみせる。

「…ふっ」

楽しみだ。

「バン君」

「ジン、天野は？」

「どうやら他にやることがあるみたいだね」

「アスカもそんな感じだった… オーディションは？」

「… もう飛んで行ってしまつたよ」

君を騙すのは心苦しい… だが、きっと

「また会えるさ、必ず」

「… そうだな」

—— 君を手に入れる

「もういいんでよか？」

「ああ、今はこのくらいで構わない。特に問題もなかったからな。また使わせてもらう」  
本当にありがとう、オタクロス！お陰でモーターが手に入ったよ！

「そういえば、何故女体なのだ？」

「ああ、それは――」

それは？

「ワシの趣味だよ」

ああ、うん

「お陰でさくらたん等身大化計画がかなり進んだだよ」

ほほ、さくらの等身大化とな。良かったな、さくらさん

!!!!

偶には外に出たいつて？いや、だって、ねえ… もっと使ってほしい？

「… オタクロス、さくらが最もLBXとして使ってほしいそうだ」

「な、なにい!？」

あゝあ、もうテンション上がりまくってるよ…

「我が王よ、そろそろ出発しよう」

「そうだねフェンリル。山野博士に当って、もうちよつと強くならなくちゃ

「今回の反省点を生かすためだな」



その場にいたヒロ達は、後にオーディーンにこう語ったという。  
「あのバン（さん）は、自分達がよく知るバンでは無かった」と。

「ミツケタ：：ミツケタ：：デモ、サキニコワサナキヤイケナイ：：」

海を泳ぎ渡り切った亡霊は、無差別にLBXを破壊した。

「モット、ヨコセ：：ヨコセエエエエエエ!!!!」

コアボックスを残すように、四肢をむしり取り、中のバッテリーに手を伸ばす。

「コレデマタ、アノヒトニアエル：：」

発射された銃弾を全て、己の拳で焼き溶かす。

「マツテテ：：オーディーン」

亡<sup>イフリート</sup>霊は止まらない。自身のコアボックスの中身を失ってもなお、彼を追い続ける。

その中身を全くの別物に変えながらも、目的だけは決して変わらない。

(スレイブプレイヤーになつては) ないです

「すまないオタクロス」

『別に構わんでよ。それよりも』

「分かっている。全てが終わつたら、さくらの言葉を伝えよう」

時間をかけてまで山野博士の元へ行つたのに、すぐさま移動だなんて考えられない……

「苦勞をかけさせてすまない、オーディーン」

「構わない。真実を知つた今、貴方の傍を離れるわけにもいかないからな」

山野博士の目的は、オメガダインの計画を阻止すること。まさか宇宙に軍事基地があるとは……

記憶が一部欠損している…… 何故だろう？

「君の身体を調整させて貰う」

「ああ、頼む」

私の身体は山野博士に任せてつと、フェンリルの様子を見に行かなきゃ

「待たせたな、フェンリルのマスター」

「オーディーン、だったな。その姿は――」

あ、早速それを聞いちゃう？

「オタクロスの趣味だそうだ」

「・・・ぶれないなあ」

ほんとそれ

「それよりも、改良は上手くいつているか？」

「まあ何とか、な。でも、まだ完成とはいえないな」

「ほほ、フェンリルのアーマーに、アキレス・デイドの飛行ユニットを合わせるの  
か」

「中々面白い機身体体になりそうだな、フェンリル」

「！、オーディーン、フェンリルの声が聞こえるのか!？」

知らないんだっけ

「ああ、基本的にオリジナル機の殆どが意識を持っている。その中でも意識がはっきり

しているのは、私達山野博士が製作した機体ばかりだ」

例外もいる……それがイフリート

「そのCPUを、アキレス・デイドに入れてくれ。それだけでかなり性能が変わるはずだ」

フェンリル、ようやく君に身体を与えられるな

「フェンリルのCPU……ありがとな、オーティーン」

「構わない。私がこの姿の時は、天野ミカドと呼んでくれ」

「わかったぜ、ミカド」



「動きがいつもよりも、いや、元に戻ったっていうべきなんだろうな」

ああ、我が主よ。身体が異なっているけど、この感覚を忘れるはしない。

「いつか、お前とも話してみたいぜ」

勿論だとも。我が王ならばそれが可能だ。この戦いを、終わらせてからならば。

「アスカ!？」

「なんでこんなところで倒れているんだ!？」

「ジオラマから、何かが…!？」

ああ、もう来てしまったか。マスター

「オー、デイン…。」

「行こう、ミカド君」

「はい」

もうこれ以上、私の世界の平和を奪われないために

「ミカド…。」

「久しぶりですね、山野バン」

「…ミカド君、動画が用意できたか？」

「ええ、全て取っています」

このアクアリウムの地下にある工場、それを設計した者もある意味天才だよなあ……  
何で工場内に、見えないようにΩのマークを散りばめちやっただろう？

(戦いに決着が付か) ないです

「フューチャーホープ号に突入する！」

二箇所あるパラダイスのコントロールルームへ向かうんですね

「……アイツ、近くまで来ているのか」

「どうしましたか、ミカドさん」

「いえ、何でもありません。さあ行きましょう」

イフリート…… 貴方は何故私を追うのですか？

「久々だな、パンドラ」

「…… うん、フェンリル…… オーディーンは、何であんな姿に？」

「兄様には兄様の考えがあるのだろう。それよりもだ、二人共」

「兄様の中に居たのだったな… その感想を聞かせてもらおうか？」

「レックス!？」

彼は、レックスではない…。だが、もし生き残っていたとすれば？

だが、サターンの爆発からあの傷で脱出できるはずがない。それに…

この違和感は何だ？

「行け、キラードロイド…。LBXを、破壊しつくすのだ…。」

この怪物に關してもだっ!？」

「な、何だ!？」

「キラードロイドの拘束が破壊された!？」

「…… やっぱりここに来ていたか」

『ミツケタ：： オーデーイン!!!』

「私は見つけられなくなかった!?!、イフリート」

『デモ、マダコワサナイ：： サキニコワサナキヤイケナイノハ、オマエダ』

レックスの作ったキラードロイドが目的なのか? でも……

「…… 今は共に戦ってくれ、イフリート」

私も、本気で行かせてもらおう!

「博士、身体を頼む」

「わかった」

「イフリートが、動いている？」

「ミカドさんがオーデインだなんて…。」

「ミカドの奴、話してなかったのかよ」

「どういう事なんだ、カズ？」

「ミカドはある目的の為にオタクロスに身体を作ってもらったんだとよ。さて、俺達もあいつらに加勢するぞ！」

「ええ！」「ああ！」

「… マスター、離して欲しいのだが…」

「この戦いの後、必ず、俺の傍にいて欲しい」

それは、出来ない

「すまないマスター。それは出来ない。君も見ただろう。キラードロイドと互角に戦うイフリートの姿を」

イフリートは、今回私を追ってこなかった。その理由は分からない。でもまた襲って



来た時には、マスター達を捲き込むわけにはいかない。

「もう失いたくないんだ。レックスも、オーディーンも……」

……マスターはこれ以上大切な人々を失いたくないんだ。宇崎さんが死んだときも、何とか乗り切っただけだったのだろう。それは、私も同じだ。

「……この戦いを終えたら、アイツとの因縁に決着を付ける。マスターも、レックスとの因縁に決着を付けるんだ」

「マスター達は、無事だろうか……」

さて、マスター達の事も気になるが、いい加減に終わらせな!ちやな。

「……イフリート、今日で終わりにしよう」

『……ぐるうあああああああああああああああああああ  
!!!!!!』

(ストーカーが進化して) ないです

「ほらほらどうしたイフリート！お前はそんなものか!？」

『ガアアアアアアアアアア!!!』

二丁拳銃で攻めながら!距離を置き続ける…。いくら邪道と言われようとこれだけは譲れない。

『ガアウー!』

「げっ!？」

ヴァ、ヴァルソダースだと!?!やべっ、このままじゃ直撃しちまう!

「あ、危なかった。…」

盾を犠牲にする事で直撃を回避したけど…。もう全身が痛い。

『グルウアアアアアアアアアア!!!』

マジかよ…。拳に炎を纏ってやがる…。!!あれで殴られたら、アーマーが溶けちまう

!?

「てか、その腕どういう仕組みなんだよ!？」

うん、武器腕とかあるけど…。その腕って武器腕じゃないんだよね?



そう、既にイフリートとの決着は着いている。

「… 終わらせよう。もういいんだよ、イフリート」

最初から分かって居たのだ。イフリートのバッテリーとCPU、モーター共に限界がきていることに。

『マダ… タタカエル!!!』

イフリート自身の意思はまだ闘おうとしているが、それに機身体体がついてきていない。

「せめてもの償いだ。あの日、お前のコアボックスを空にした時に破壊しなかった私が

『超プラズマバースト』

「… さらばだ、亡霊」

えっと、私はイフリートに勝ったんだよね？

『ああ、そうだぞ？』

なら聞きたいんだけど、これは一体？

『ん？ああ、簡単な話だ』

『俺はお前を守る。父として、な』

ほっんと、一体どうしてこうなった!?

『どうやらバン達がパラダイスへ行くみたいだな』

いやあの… 何でもそんなに普通に普通でいられるの？

『簡単な話だ。亡霊はお前が破壊した。そして俺が産まれたただけだぞ？』

その産まれたが問題なの!!!

『ん、そう言われてもな… LBXは不思議な物としか言いようがないな』  
はあ… 仕方がない。マスター達の元へ急ぐぞ

『お前がそう望むなら』

… ホントにイフリート？

『ああ』

平穩の向こう側って、どうなってるんだろいなあ…

(もう理解したく) ないです

ええい邪魔だ!!!

『JETストライカー』

「気を付けろ。余り威力が強いと発進出来ない可能性がある」

それは勿論!!! サツサとあの包帯グルグルレックスを倒して平穩を手に入れるんだ!!!

「… 無理だな」

無理じゃないやい! って、もう乗り込んでるじゃん!?

「急がないと置いてかれるぞ」

全身痛いけど、知ったことじゃないね!!!



「… 身体をうまく動かせない」

「エルシオンもそうなのか… こればかりは無茶をしてみましたな」

「後悔は何のだろうか？」

「勿論だとも。マスターがきつと世界を救ってくれる。僕はそう信じてる」

「… そうだな、ペルセウス」

ああ、兄様よ… 貴方がこの船に乗っているのは分かっているが、あまり無茶はしないでいただきたい… 貴方に居なくなられては困る…

「父さん、そのカプセルは何？」

「これはオタクロスが乗せたものだ。ある意味最後の切り札になるかも知れないらしい」

「ふうん…」

「何でだろう… オーデーインの気配がするんだけど、もう一つ懐かしく感じる気配がある…」

「開発を続ける。念の為にエルシオンのメンテナンスをしておくんだ」

「はい！」

わあ… 周りが真っ暗だあ…

「なんだ？灯りが欲しいのか？」

いや、そういうわけじゃないんだけど…

「なるほどな。宇宙は真つ暗闇だったと」

知識はあつただけだね… 実際に見てみるとこれはこれで… げっ

「… どうやら空気を読まないお客のようだな」

「ここまでの戦いで、私の身体は熱暴走寸前だ… このまま戦えばきつと、動けなくなり破壊される

「お前はここでおとなしくしている。この場は、あいつらに任せれば大丈夫だ」

… わお、綺麗な花火――

「LBXのブレイクオーバーで出来上がった天の川か… 本物を拝めるとは」

ロボットアニメ（宇宙）の一部で登場するときがあるよねえ… 今回は彼らのお披露目だからかな？

「さあな。ただ言えるのは…」

あれ… 何だか眠く…

「お前には少し休憩が必要な様だ」

『死にたくない』  
!? 今のって.  
「よお、起きたか」

イフリート、起こしてくれても良かったのに……

「お前の父である俺は、お前に必要なものを与える。それだけだ」

あれ？体が軽い？

「無重力ではないからな。それはこれまでの戦いで温まっていたコアボックス全体を冷やした結果だ」

…… 無茶しまつてましたね

「エターナルサイクラーの技術の応用とはいえ、発生した熱だけは貯まってしまうからな」

この戦いが終わったら、タイニーオービットに行つてこの<sup>機</sup>身体体のメンテナンスをお願いしようかな

「それがいい、俺がT.Oまで行こう」

…… 余計なことをしないでよ？

「お前がそう望むなら、しないさ」

少女は駆け足で人工衛星(仮)パラダイスの中を進んでいく。

「…くっ」

『あまり無茶をしない方がいい。その体は宇宙での活動を視野に入れていないからな』

「わかってる!!」

彼女は眠っている間にとある声を聴いたのだ。感情を感じられないその声からは、恐

怖を感じられた。

「……この先だ、イフリート!!!」

『わかった!』

「必殺ファンクション!!!」

『超プラズマバースト』

こじ開けた扉の先には、見慣れた顔がそろっていた。そして――

「レックス……」

『マスター……いや、人格を作り上げただけの偽物か』

レックスがいた。

『俺は、山野バンに、子供達に希望を見出した。オーデインからも、新たな未来が見えた』

イフリートとの戦いの中で、自爆寸前のサターンから逃がしてくれた彼は、新たな希望を、しっかりと手に入れていた。

『ハルカさん』』

『ハルカさん』』

『ハルカさん』』

『消えたくありません』

「すまない…… だけどきつとまた会えるはずだ」

少女には何も出来ない。ただ彼らの旅立ちを見送る事しか出来ないのだ。

『マツマ』』

『助けて』

『死にたくない』

『消えたくない』

『助けて』

『お母さん』

『お母さん』

『マツマ』

『マツマ』

『マツマ』



『マツマ』

『マツマ』

「…… ハルカさん、彼らに新たな旅立ちを」

「…… わかったわ」

少女は彼らは何故自身に助けを求めのかが理解できていた。今、彼らに最も近い存在は彼女だからだ。

『ハルカさん』

『ハルカさん』

『ハルカさん』

『ハルカさん』

『ハルカさん』

『『お母さん』』

ねえイフリート

「なんだ？」

アダムとイヴは、幸せになれたかな？

「…… お前がそう望むなら、そうなるだろうな」

……  
きつと、必ず

あ、そう言えば、何で彼らは私のことを『ママ』って呼んだんだろう？

「俺は父で、お前が母だ。あいづらにはそう感じ取られたんだろう」

……  
マッテ、モノスゴクイヤナヨカンガスルンダケド

(友情ごっこじや) ないです

日本に帰れる!

「ようやく、ミカドを堪能出来る...」

あの、マスター? 既に堪能してませんか? 大会の後から私、ずっと捕獲されている気がするんだけど

「...バン君、日本に戻ったら久しぶりに君の家に行っていていいかい?」

「ああ、勿論。それに...」

私の身体は、タクヤさんにイフリート入りで持って帰ってもらってるし... 今の身体はこのアンドロイドだけ...

逃げられない!

「何だ? 事故が起きたみたいだな」

事故? いやはや、最後まで平穏じゃないなあ...

「LBX!」

何で!? 既にオメガゲダインは閉鎖されたし、ブレインジャックなんて起きないはず...

山野博士達はNICCS本部に戻ったし、マスター達は戦ってる…。今の私にはできることはない。あるとすれば…

「はあ!!」

「た、助かった..」

この事件で巻き込まれた人々を助け出す!

.. おかしい。車に閉じ込めたけど、脱出できないわけじゃない。まるで人質みたいだ..

『見つけたよ、お兄ちゃん!!!』

え、ま、まさか..

「ミネルバ!」

何故ここに!?!それに自立稼働しているってことは、この事件の首謀者と同じことになってるのか

「何しに来た、ミネルバ。お前は自身のマスターの元で」

『ベクターがね、お兄ちゃんを捕まえる手段をあげるから、捕まえてきてって言ったんだ。そして、自分でこの身体をコントロールできるようになったんだあ!!!』

アブねえ!!撃ってくるなんて..

『待つてよお、お兄ちゃん..。一つになる?』

や、ヤバイ!?!このままじゃこの身体を破壊されちゃう!?



『… あくあ、ベクター壊されちゃったか』

何とかなった… どうやら大元を倒せばこのブレインジャックは止められるみたいだ

「… 帰るぞ、ミネルバ」

『は～い』

これだけなら素直ない子なんだがな

オタククロスに、ミネルバとこの身体を直してもらわないと…





へ、変形したあ!!???  
しかもベクターが!!???  
いっばいだあ!?

ぶ、不気味だ：： ちよ、何する辞め

---



『ま』

あれ、何か聞こえる？

『まっ』

…ちよつと待ってね、この流れさ…つい最近なかったっけ？





「一体、何をしたんですか!!!」

その時、バンに戦慄が走る!

「…ミゼル、今ベクターは何処にいる」

「え?」

「…ふうん、君はそういう事に気が付けるんだ」

「<sup>オー</sup>エルシオンをどうするつもりだ」

!!!!!!!」

ミゼルには逃げられ、その上オーディーンは連れ去られてしまった。  
ベクターを確実に倒して、ミゼルを倒す。

その目的の為にバン達は究極のLBXを造る為に動き出した。  
「.....」

「バンさん？」

「ヒロか……ごめん、少し集中しててさ」

「何してるんです？」

「そういえば言っただけ。俺、一年前からLBXを作ってるんだ」  
「そうなんですか？」

「ああ、でも、中々完成にたどり着かなくて。：」

いえ、バンさん。本来ならば何も無いところから簡単に新しい物を作る事が出来る人なんてそうそうにいません。貴方の父ととこで無ければ。

『オーディーン・NEXT』、これが俺が考えた究極のLBX<sup>オーディーン</sup>。日本に一部パーツを置いてきているんだ。この際だから、俺もこれを完成させようと思つて」

オーディーン・NEXT

その見た目はほぼオーディーンに似ているが、アーマーがどこもなくオーディーンを彷彿とさせている。

「バンさんは本当にオーディーンさんが好きなんですわね」

「ああ、いつだって俺を支えてくれた相棒なんだ。ミゼルに奪われたままなんて」

バンは静かにその闘志を燃やした。日本に戻ればイプシロンが待機している。飛行出来ないという欠点はあるものの、イプシロンにはリミッターが備わっていた。

そのリミッターが解除されたとき、ミゼルは改めて考えたという。



「山野淳一郎製のLBXが欲しい」と。

(闇落ちじゃ) ないです

.....

「どうしたの、ママ」

いや、目が覚めたら目の前に顔があつたら驚かない？

「ふくん、そういうものなんだ…」

サラッと心を読まないで欲しい、ホントに。

今どういう状況？

「新しい身体はどう？」

機身体体？いや、以前と変わらず…ッ!?

なんで…この機オーディエン体ンになつてるんだよ…

『イフリートは、何処だ!!』

「山野博士製の音声ユニットから音を出していたんだね。しかも、それはママにしか使

えない」

ミゼルが何者なのかは分かつてる…マスター達にこれ以上重荷は背負わせられない

!!

運がいい。ここには盾も、槍も、片手銃もある!!

「何をしようとしても、無駄だよ」

ひ、引き金が、引けない…槍を投げることも…

動くことさえも…!!

「既にママの身体は手に入れた。後はこの世界を平和にするだけ…その準備も最終段階に入りつつあるんだよ？」

———なんでミゼルはこんなことをするんだ？

「僕は、アダムとイヴの意識を合混ぜ合わせた体存在。そんな僕だけど、生まれた時から知っていたことがあったんだ」

その、知っていたことって

「ママを手に入れる。この世界で経った一人の僕と、僕達と同じ存在を」

!!!!!!!

「待っててね、早く僕と同じ様なアンドロイドの身体を手になれるから」

ちく、しょう…また意識がっ

「お休み、  
ママ」

「やあ、よく来たね」

「ミゼル：・ オーディーンはどこだ」

「答えると思ってるの？」

「：・ いや、別にいい」

「：・ バンさん？」

「お前を倒せればそれでいい」

ミゼルは驚いていた。山野バンが使うであろう機体は既に傷を負っている。

だが、そんな彼の傍に飛んで現れたのは以前見つけ出した設計図とよく似たLBXだったのだ。

「… 完成してたんだ、オーレギオン」

「このLBXはオーレギオンじゃない」

ミゼルは自分の知らないLBXとその制作者であろう山野博士に興味を持ち直した。

先程までは母親ミカドの事しか考えていなかったのに。

「俺がミカドの為に作り続けてきた、今迄を詰め込んだLBX…」

そのLBXは瞬時に両手にエネルギーで出来た槍を出現させ、ミゼルへと投げる。

「… 欲しい」

ミゼルのその小さな声は、壁に突き刺さった槍により破壊されたLBXの音でかき消された。

「オーティーン・B」、それがお前を倒す俺の相棒だ」

ミゼルはゆっくりとその眼を見開いた。

(一人じゃ) ないです

T・O・社は外側から見るだけならば特に変なところは無い。ミゼル・トラウザーが外壁を破り片手を入れていなければだが。

「アハハ！スゴイね、ますます欲しくなっちゃった」

「……」

その内部ではミゼルとバンが戦っていた。周りのことなど考えずに。

無数のベクターが人型のまま飛んでいるオーディーンへと飛びかかる。だがそれは呆気なく破壊された。

「……」

今、バンはCCMを持っていない。代わりに眼鏡を掛けていた。この眼鏡こそが今のバンのCCMで有り、それと同時に特殊モードを発動するカギでもあった。

「……いくぞ、『クロスオーバー』!!!」

「!!!」

オーディーンと共に創り出した特殊モード、クロスオーバー。その能力はLBXとの感覚の共有。

バンが攻撃を望めばオーディーン・Bはその通りに動く。発動条件は経ったの二つ。

一つ、LBXにはそれぞれ意識があり、その目的がプレイヤーと同じ場合。

一つ、強い愛を持つ場合。

この二つが揃い、クロスオーバー・モードは発動へと至る。

「!?、は、y」

『遅い』

Bの中にはイプシロンのCPUが入っており、バンと目的を同じとしているのだ。

それは単純にして、重かつた。

【オーディーン<sup>ミカド</sup>を手に入れる】

彼らにはもう取り戻すという考えはない。周りも既に見えていない。本来意識疎通が出来ないイプシロンも今回ばかりはバンと意識を共有出来ていた。





「僕を守ってくれる、大切な、大切な、ママが」

『…我が子の障害を、排除する』  
『オーディエンス』  
!!!!!!!

あ、れ：： 身体が、うごかな、い——？  
たし、か。 みぜルにツカマツテ：：： それから——

『ミゼルに会ってその正体を知った、だろ』

ああ、そうだった—— っつて、え、何でここに居るの？

『お前がそれを望んだからだ』

あ、そっか。私が心配したから

『時間がかかったが戻ってこれた。さあ、あの子を止めに行くんだろ?』

うん、そうだよ。止めなきやね、あの子を。

『お前が望むがままに』

(壊れて) ないです

「… 動ける」

『そうみたいだな』

本来ならここに自分はいないはず… 一体何が起きてるんだろうか？

「ん？、で、デオ!？」

あ、おはようございます。今どこです？

「あ、ああ、ここは日本で、タイニーオービット社の正面だよ」

… 成程、それじゃあ向かおうか

『その前に、山野博士からの贈り物だ』

おつ、新しい機体か!! へえ、今度は変形しなくても飛べるのか。

オタククロスは自分の目を疑っていた。目の前で、CPU無しでミカドの身体が動き出したのだから。

「今のは、本当にミカドたんだったものでよか…?」  
その疑問に、誰も答えることはなかった。

取り敢えず走ってるけど、これからどうしよう…

『社内は崩壊してるな。どうする?』

中を進むことは出来ないか…

『そうだろうと思つて、切り札を用意しておいたぞ』

あ、そうなの?今すぐ使える?

『望むならばな』

ヒロは内部に残ったバンの事を心配していた。

「バンさん……」

彼の心にあるのは、ただ無事に帰ってきてほしいという思いのみ。

まだまだ、自分は半人前なのだ。何度も助けられたバンを助けたいとも考えていた。

「バン君バン君バン君バン君バン君」

隣で地面に体育座りしながら呪詛の様に名前を呼び続けるジンを元に戻すためにも。

ああ早く戻って来て下さい、と。

そんな仲間達の胃に激痛が走る。

「……誰か俺を叩いてくれないか？」

「タクヤさん……」

「ミゼル・トラウザーの手の上にミカドの姿が見えるんだ……もう俺はダメかもしれないな

い」

最後まで言い切るまでにタクヤは顔を青くしてゆく。そして倒れてしまった。

地獄絵図である。

山野博士を除いた大人たちは、胃からの激痛に耐え切れずその場に膝をつき始める。





「……早くッ、戻って来て下さいいつつつつ  
!!!!!!!」

まさかミゼル・トラウザーを動かせるとは……

『今ミゼルは自身の意識を殆どオーディーン<sup>L</sup>に注いでいるからな。乗っ取るのは簡単だった』

……もしかしてなんでもできたりする?

『阻むモノをケセ、と望むならばな』

あ、そんなことはないから。たぶん。

『さあ、まもなく到着だ。行って来い、母さん』  
うん、ミゼルを止めてくるね。父さん。

(迎えに来たわけじゃ) ないです

イフリート  
父さんが操るミゼル・トラウザーによって、ミゼルが開けた穴から社内へと入る。すると、自分の機体身体とマスターの新しい機体(何か自分に似てる)が戦っているのが確認できた。既に自分の身体は攻撃により一部破損しており、各関節が外から見えても悲鳴を上げているのがわかる。

「もうやめてよッ!!」

気が付くと、自分は声を出してしまっていた。お互いの機体と操縦者がこちらを勢い良く振り向く。ちよつと怖い…

「ママァー!」

『オーディーン!』

ミゼルの顔は驚きに染まっている。それは今自分が動いていることにあるのだろう。マスターの方は只々嬉しそうだ。

「これ以上、闘い続けるなら私も参加しますが構いませんか?」

「分かった、辞める」

うんうん、聞き分けのいい子は好きですよ

「今、好きって思われた」

サラツとLBXのココロを読まないでください。まあ取り敢えずこれで一件落着かな。

「さあ二人共、今まで迷惑を掛けた人達に誤りに行きますよ」

「でも…」

それをミゼルが洩る。

「僕は、僕たちは、この世界で生きてはいけない…だって、僕がこのままここに入ればまた迷惑をかけちゃうでしょ？」

それは、アンドロイドである彼にはないはずの機能だった。涙を流すというものは、決してプログラムされていないのだから。

「わたしたちは、死にたくない、死にたくないんだ、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい、生きたい…」

膝を突き両手で頭を抱えたまま壊れたかのように繰り返し続けるミゼル。自分はそれを包み込むように抱きついた。

「なっ」

「マスター、ステイ」

驚きそのまま動き出そうとしたLBXとマスターに止まるようにいえば、(・ω・)

とした様子でその場に止まってくれた。少し罪悪感がある為、後で構ってあげることしよう。

「ミゼル、私は貴方に生きて欲しい。仮にも母と呼んでくれた存在は初めてだったんですよ?」

「う… あ…」

システムがエラーを出しているのか、全身に雷を発生させ始めるミゼル。それでも、離れない。

「でも、今の世界は貴方を受け入れられそうにはありません。だから…」  
今の自分に出せる答えはたった一つ。

「私と、旅をしませんか?」

今迄自分のためにして来た旅を、誰かのためにする。それがミカドオーディーンが出したミゼルに

対する答えである。

「い、いノお？ぼっくは／わた）し%はい木テ、…、イイ@んお?！」

既に発声機能が故障しているのだろう、ミカドの腕の中でミゼルはただ母の解を待つ。それが、一番正しいと信じているかのように。

「ええ、生きてて良いんです。この世界が敵に回っても、私が、私達が味方です」

ミゼルの機体<sup>身体</sup>は遂に火を吹いた。抱きついていたミカドを突き飛ばし、トラウザーへと飛び乗る。そして、トラウザーはヒト型のまま空へと消えていった。

『これがお前の選択か?』

『うん、これが僕私達のの選択だよ』

『そうか、先に母さんの元に戻る。何時でも帰ってこい』

『… ありがとう、父イフリートさん』

この日、世界に新たな種が産まれると同時に行方不明となった。世界中に散らばったベクターは残らず全て爆発した。



「ミカドっ」

「…はい、私はここにいますよ」

穴から夕陽が見えるようになった頃、ミカドは背後から抱きつかれたまま動けなくなった。

「良かった… 本当に良かったッ」

自身の機体を見ながら「身体は無事じゃないんですけどね」なんていう程ミカドは空気が読めなくはなかった。

「心配をお掛けしました」

「… ツツ!!つつ!!」

言いたいことが沢山あるのだろうが、今のバンには口に出す事が出来なかった。

ミカドは一人、抱きしめる力が強くなったバンの腕に手を添え、空を見上げた。

空にはいつもよりも早く、力強く光る一番星があつた。

(やはり俺もう、闘いたく) ないです

ミゼルが星になってから、既に半月程の時間が流れた。

「ほら、もう学校の時間ですよ。起きてください」

「・・・ おはよう、ミカド」

自分ことミカド／オーディーンは今日も今日とてマスターであるバンの抱き枕となっていた。アンドロイドであるその機体はオタクロスによって改良改悪され続けており、ついには人の肌の柔らかさを再現するまでになっている。

「ええ、おはようございます。さあ、鞆の準備は完了していますので朝食を取りに下りてきてくださいね」

ミカドはバンが起きる前から目覚めており、既に一階にいる母から朝食が出来上がっている事を伝えられているのだ。

『マスターが起きた。これから下りてくるはずだ』

「あら、いつもありがとね。オーディーン」

『無論だ、我が母よ』

「うーん、ミカドちゃんみたいにはいかないのね・・・」

オーディーンはミゼルとの戦いの中で自身の意識を二つに分けることに成功したのだ。それがミカドの身体に意識が宿った理由である。

『仕方がないのだ』『それが私ですから』

「あら、相変わらず可愛らしいわね」

頬を赤らめながらミカドは視線を逸らす。顔が赤くなったり、表情が以前よりも豊かになったのは全てオタクロスの改良のおかげである。

「そう言えば、お父様はどちらへ？」

「ああ、朝から出かけたわよ？ なんだか急ぎの用みたいだったわ」

「… オタクロスの元に居るみたいです。お弁当を届けましょうか？」

「ええ、頼んだわよ？」

『必ず、届ける』ます』

バンの母から弁当を受け取ると、メイド服を着た幼女は空を飛ぶLBXと共に外へと飛び出した。

『母さん、ミカドはどこ？』

『もう出かけたわよ』

彼女の仕事は、山野博士に愛妻弁当を届ける事である。それを口実に、自身のマスタから逃げ出している訳ではないのだ。

「オタクロス、お父様、おはようございます」

「おお、もう来たデヨか」

「おはよう。ミカド」

秋葉原のオタクロスの元には、朝早くから山野博士の姿があつた。これはミカドやオタクロスによつて産まれた一つの説を証明する為である。

LBXには、その操縦者に似た心が宿る。その心は本来なら表に出てくることはない

が、強力な自我を持つ事が出来れば可能ではないか、というものである。

「この前、さくらさんの声を聞いたんデヨ」

そんなオタクロスの言葉とオーティーン<sup>アキレス</sup>の自我の芽生えを元にサクラは調べられているのだ。

「ミカド、サクラの声は聞こえるか？」

「ええ、問題なく聞こえます」

メイド服を着た少女の肩にLBXが着地する。そのまま両目を点滅させ、サクラへと接続すれば、彼女の自我を確認できる。

『あああああああ、私の愛しのマスターっ！私がお世話してあげますからねえ』

「……ええ、聞こえていますとも」

「どうかしたのか？顔色が悪いが……」

「いえ……」といいながらもミカドは本来の目的を果たしその場を後にする。今回の目的は愛妻弁当を届けることだけなのだと思いつ出したのだ。

「……ここから、ですよね」

ミカドは一年前、初めてVモードを起動させたことを思い出し出していた。既に何度も来た為に見慣れた河川敷を眺める。その場でLBXバトルを行っている子供達は現在学校である。

「……イフリート」

『何だ、母さん』

ミカドは一人河川敷の草むらに腰掛け、自身の中にいるイフリートへと話しかける。半月程経ったとはいえ、ミゼルがどうなったのかをミカドは知らないのだ。だからこそ何度も質問しているが、イフリートは一度も答えないのだ。

『ミゼルは必ず、帰ってくる。あの子が母さんから離れ続けられるとは考えられないからな』

「……うん」

飛行形態へと変形させたオーデイン・mk-2<sup>身</sup>を飛ばして空を見上げる。あの日見た一番星はあれから一度も見つけられていない。

「……」

ミゼルが起こした事件は早急に全世界で処理されていた。今ではもう、何もなかったかのように日常が流れている。

『もう学校が終わる時間だったか』

「ああ、もうそんな時間だよ」

少しづつ日が長くなり始めた。そんな中、バン達が河川敷へとやって来る。

「ただいま、ミカドっ」

「……く、苦しい、です」

ミカドは日課になりつつある帰宅、又は長時間会わなかった時の抱きつきに未だなれないでいた。

「またやってるわね」

『オーデイン、自由なの、ズルい』

『パンドラよ、それは何度も言っているが諦める。我が王よ、久しいな』

『苦しいことに変わりはないのだ。何度も言っているのだが、マスターは聞いてくれなくてな……』



「いいじゃねえか。仲が悪いよりかはマシだぜ？」  
こうして彼らの日常は過ぎていく

はずだった。

「ただいま、母さん。父さん」

突然、河川敷に声が響く。全員が迫る影に気が付き空を見上げれば見覚えのあるLBXが降下してきたのだ。

「オーデインン…。」

あの日、ミゼルが消えたことで爆散したLBXがそこにはいた。

「また、会えた…うん、僕は生きている…。」

ミゼルであろうオーデインンは両こぶしを再び握り締め、武器であるリアリエーターを構えた。

『さあ、山野バン。僕に力を貸してくれないか?』

「何?」

『僕が帰ってきたという事は、母さんが再び旅を始めるといふ事さ。ここまで言えばもうわかるだろう?』

「ああ…。」

ゆらりと立ち上がったバンに恐怖を感じたミカドはすぐさまその場を離れる為坂を

駆け上がる。

「逃がさない」よ!!!」

オーデイドは闘うのが好きではない。それが自分を狙っている者達だろうと、だ。

「もう、闘いたくないんですッ  
!!!!!!」

オーデイドに安息の地などないのである。(無慈悲)